



〔銘文〕
武蔵国河肥庄
新日吉山王宮
奉鑄椎鐘一口長三尺五寸
大檀那平朝臣經重
大勸進阿闍梨門慶
文應元年大暦十一月廿二日
鑄師丹治久友
大江真重



〔銘文〕
遠江權守平朝臣經重
百十一町
文永九季左側面五月日

河越経重の遺品

河越氏関連年表

年 号	主なできごと	河越氏・館に関わるできごと
1155(久寿2) 1156(保元元) 1159(平治元) 1160(永暦元) 1180(治承4) 1184(元暦元) 1185(文治元) 1189(文治5) 1192(建久3) 1211(建暦元)? 1221(承久3) 1226(嘉禄2) 1232(貞永元) 1260(文応元) 1272(文永9) 1274(文永11) 1275(建治元) 1281(弘安4) 1333(元弘3) 1338(暦応元) 1350(観応元) 1353(文和2) 1368(応安元) 1462(寛正3)	保元の乱 平治の乱 源頼朝、伊豆に配流 源頼朝挙兵 壇の浦の戦い 源頼朝、奥州平定 源頼朝が征夷大將軍 承久の乱 文永の役 幕府、六条八幡宮造営 弘安の役 鎌倉幕府滅ぶ 足利尊氏が征夷大將軍 観応の擾乱 足利義満が征夷大將軍	秩父重隆、源義平と大蔵館合戦 保元の乱に河越氏参戦 この頃河越莊、新日吉社に寄進 河越氏、平氏から源氏に下る 河越重頼の女、義経に嫁ぐ 河越氏、義経縁者により所領没収 義経とその妻子、陸奥国衣川で自害 入間川洪水で、河越氏館が被害 河越重員活躍す 河越重員、武蔵留守所惣檢校職に補任 河越重資、父重員より惣檢校職を引継 河越経重、新日吉社に銅鐘を奉納 河越経重、高野山町石を建立 河越氏、六条八幡宮造営の費用負担 この頃河越直重、相模守護となる 平一揆、河越館にて鎌倉府に背く 足利義政、上杉持朝に河越莊を安堵

案内図



〔交通案内〕
【電車利用】 東武東上線 霞ヶ関駅北口下車、徒歩約15分
【車 利 用】 駐車場50台
大型バスの利用につきましては、下記問い合わせ先までご相談ください

●問い合わせ先●
川越市教育委員会文化財保護課
〒350-8601 川越市元町1-3-1
TEL 049-224-6097(直通)

リサイクル適性 (A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

国指定史跡

河越館跡



川越市教育委員会

河越氏と河越館跡

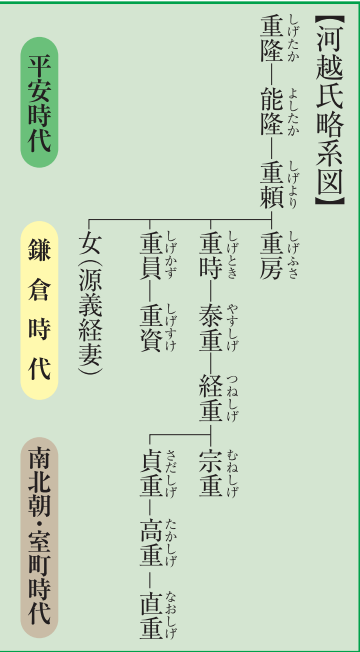
河越氏は、桓武平氏秩父氏の流れを汲む、武蔵国で最も勢力を誇った武士です。秩父氏の庶子が平安時代の終わり頃現在の上戸に館を構え、河越氏を名乗りました。

治承4(1180)年、源頼朝が伊豆で挙兵すると、河越氏は初め敵対しましたが、後に御家人となって平氏討伐軍に参戦します。この頃の河越氏の勢力は、重頼の娘が源頼朝の弟義経の妻に選ばれたことから推し量ることができます。おそらく興入れの日、重頼の娘は、お供の者たちと河越館から都の義経のもとへ向ったことでしょう。ところが、後に義経と頼朝の仲違いから、義経縁者である事が禍いして、河越重頼らは滅ぼされ、河越氏の勢力はここで一時衰えます。しかし鎌倉時代中頃、高野山に町石を建てたことで知られる経重のころには、かつての勢力を回復しつつありました。

鎌倉時代の後半になると、館の中に時宗常楽寺が開山され、河越館は大きく変貌します。後に時宗15代上人尊恵が訪れ、「南無阿弥陀仏決定住生六十万人」と書かれた念仏算を配り大勢の人々で賑わうこともあったようです。

応安元(1368)年、突然河越氏や高坂氏ら「平一揆」が河越の館に楯籠もって鎌倉府に反旗を翻しますが、あえなく敗れてしまいます。これ以降、河越氏は政治の表舞台からは姿を消し、河越氏と館の関係も幕を閉じることになります。

河越氏の館は、入間川にほど近い位置にあります。ですから、時には入間川の激流が、堤防を突き破り館の住人を押し流しました(「発心集」)。しかし反面、館は入間川を利用した重要な水運基地としての役割を果たしていました。



江戸時代後期の河越館跡のようす(新編武蔵風土記稿より)



根石の礫を持つ掘立柱建物跡



木製の井戸側を有する井戸



金箔の残る木製念珠



河越氏の屋敷地を区画する堀



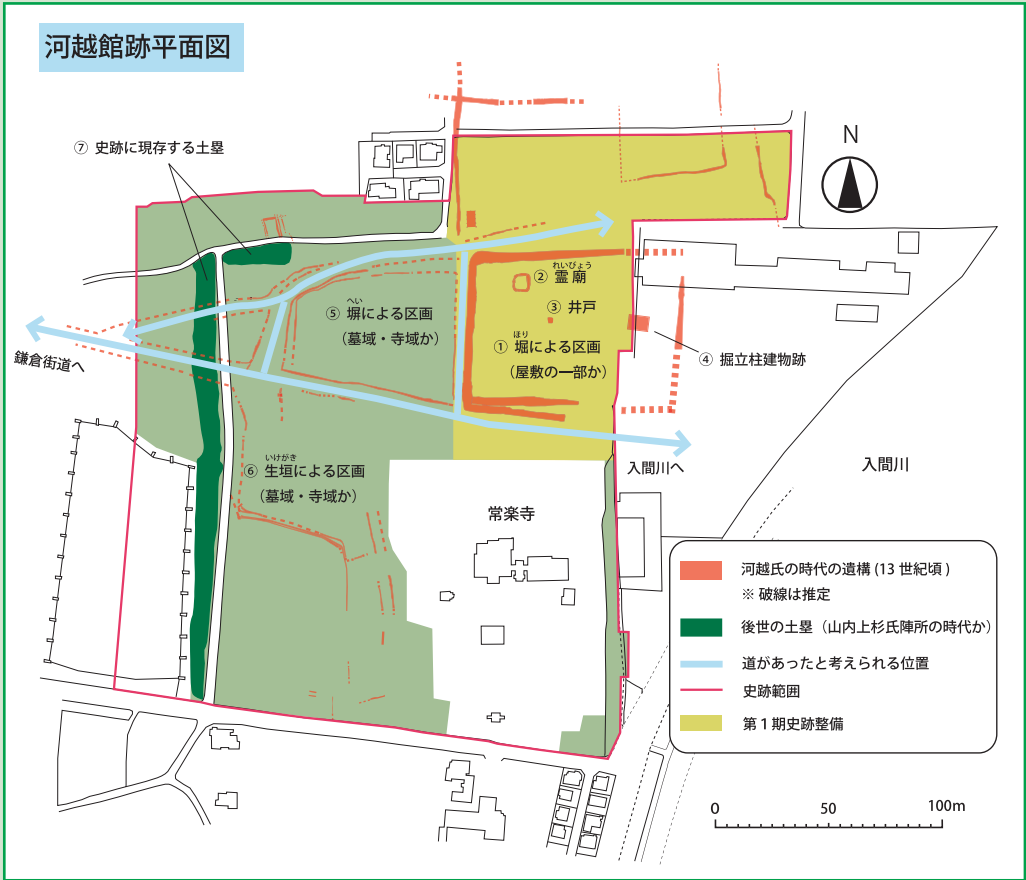
堀による区画（青線は堀の基礎）



堀に捨てられた板碑



土 壘



葺き石の盛り土を伴う霊廟



蔵骨器の蓋として使用された捏ね鉢



火を受け変色した軒丸瓦



中国製の天目茶碗



漆が塗られた風炉



中国製の青磁・白磁



茶臼



古瀬戸の平椀



かわらけ
(左:山内(系)かわらけ 右:手づくねかわらけ)



銅製花瓶

河越館跡の発掘調査

昭和59年に国指定史跡となった河越館跡は、史跡整備に向けた発掘調査が継続され、全貌が明らかになってきました。河越館跡は東に入間川、西に鎌倉街道を至近に臨む、水陸の交通が交わる要衝に立地し、様々な人やモノが集まってくる都市的な場所でした。当時の河越館は、入間川と鎌倉街道を結ぶように走る東西の道に沿って、堀・堀・生垣によって囲まれた屋敷や寺院が並んでいたようです。また、河越館がなくなった後も、この地は寺院の境内地、合戦時の陣所等に利用され、大きくわけると以下の4時期の変遷があることがわかってきました。

河越氏の時代:永暦元年(1160)頃～応安元年(1368)頃
河越氏が館を構えてから、平一揆の乱で敗北し、この地を離れるまでの時期です。この時期の遺構は、13世紀以降に使われたと思われる上幅4～5mの「コ」の字型にめぐる堀による屋敷区画が確認されています。区画内部には井戸や掘立柱建物跡のほか、霊廟と思われる塚がありました。また、屋敷区画の西隣には、堀で囲まれた区画が存在し、南側には常楽寺と生垣で囲まれた区画があったようです。これら屋敷以外の区画については常楽寺、あるいは別の寺院との関連が考えられ、宗教的な役割を持っていたと考えられます。この時期の遺物は、手づくねかわらけや青磁・白磁、火を受けた軒丸瓦等が出土しています。

常楽寺の時代:14世紀後半～15世紀後半
常楽寺は河越氏の持仏堂から発展したと考えられる時宗の寺院で、河越氏が衰退したあと寺域を広げたと考えられています。この時代の遺構は、河越氏の時代の宗教的な役割を持つ区画とほぼ同じ位置に、幅1m弱の溝による区画が確認されています。区画内部は多数の土坑があり、板碑・五輪塔・宝篋印塔といった供養塔が多く出土することから、墓域が存在したと考えられます。他にも多数の茶道具(天目茶碗・茶臼・茶入・風炉)や瓦、仏具である銅製花瓶等が出土し、粘土を底に貼りつけた池状遺構があることから、喫茶に関わる寺院の建物や庭園も存在したようです。

山内上杉氏陣所(上戸陣)の時代:明応6年(1497)～永正2年(1505)頃
15世紀末の明応6年(1497)、扇谷上杉氏の拠点である川越城を攻略するため、山内上杉氏が陣所を構えました(上戸陣)。陣所では、幅2～4m程の大きな堀を巡らせて郭を作り、その中に井戸や地下式の建物、馬小屋等が造られました。陣所設置に際しては常楽寺の寺域を整理し、堀や井戸に板碑等の供養塔が廃棄された状況が見られます。この時期の遺物は、山内上杉氏に関わる時期・地域の遺跡で出土する「山内(系)かわらけ」と呼ばれるかわらけや、鍋・火鉢・風炉といった在地の土器類、瀬戸・常滑などの陶磁器が多く出土しています。

大道寺氏の時代:16世紀後半頃
『新編武蔵風土記稿』(1828年成立)によれば、当時の河越館跡は小田原北条氏の重臣・大道寺政繁の砦跡として伝わっていました。大道寺政繁は元亀元年(1570)頃から川越城の城代を務めており、また常楽寺には供養塔が残されていることから、この頃に河越館跡を砦や陣所として使用した可能性が考えられます。発掘調査ではこの時期の遺構・遺物が少なく、当時の様相はよくわかりません。なお、現在も史跡に残る土塁は、前記の「上戸陣」あるいはこの時期の遺構であると思われます。